

詠む広場

毎日俳壇

西村 和子選

井上 康明選

片山由美子選

小川 軽舟選

やつと来てすぐ去る秋を惜しみけり

羽生市 小菅 純一

△評▽まさに今年の実感。ようやく秋風が吹き始めと思つたら、朝晩は急に冷えこむ。秋を惜しむ思いは年々切実となるようだ。早天をかりがねの鳴き渡りけり

姫路市 板谷 繁

△評▽明け方の天空を移りゆくかりの声が聞こえている時の経過を、ゆるやかな語調が伝える。生き過ぎしかも涼風に疲れもし

大阪市 福永 都女

秋雨や向かひも見遣る窓の外

白井市 昆虫利道弘

職場では見られぬ笑顔辛煮会

東京 石川 昇

コンビニの前に大待つ十三夜

茅ヶ崎市 古田 哲弥

正座して吟醸を待つ新豆腐

東久留米市 夏目あたる

赤とんぼは寂しき肩を知つてをり

横浜市 菅沼 葉二

選挙カー去つて畑に秋西

神戸市 中林 照明

裏庭に母の声を聞く菊日和

日立市 森 彩造

大山へ日本海より冬窓

葛城市 山本 啓

△評▽大山は修験の山、山頂から日本海を望む中国地方の最高峰。大山へ向かつて押し寄せ冬の高波をスケール大きく描く。蛇笏忌や山廬詣の夢を見て

高松市 島田 章平

△評▽蛇笏忌の10月3日、夢見るような敬愛を語る。山廬は蛇笏郎の意、今も振興会が管理する。走り根の鈍く光れり木の美落つ

甲府市 清水 輝子

蜻蛉の空に轍はなかりけり

宗像市 波田 哲朗

新走りコップに満ちて溢れざる

名古屋市 可知 豊親

臍本の彼の世と此の世秋の暮

印西市 五十嵐栄子

スカイツリー下月に月の昇りけり

城陽市 近藤 好廣

木犀の終はれば何も無きごとし

小田原市 林 梢

墓石持ち洗ひてをりぬ野分あと

姫路市 板谷 繁

微笑みの弥勒菩薩や冬どるる

相模原市 はやし 央

この家もいづれ人手に障子貼る

志木市 谷村 康志

△評▽そう遠くない将来、家を手放すことになるだろうと思いつつ、やはり、冬が近づけば障子を貼り替えて気持ち良く住みたい。砂時計の青き三分夜食待つ

佐世保市 相川 正敏

△評▽夜なべ仕事が続ぎ、即席めんにお湯を注いで待っているのだらう。「青き三分」に夢がある。秋惜しむ子規の庭見て小半時

東京 林 半寿

身に入むや麻酔さめゆく夫の顔

出水市 橋口 礼子

特急の通過を待てり薄紅葉

平塚市 日下 光代

信昌機点滅つづく霧の中

川崎市 折戸 洋

一票を投じて帰路の曼珠沙華

大洲市 坂本 梨帆

格子戸に続く延べ段石路の花

香芝市 河野 嘉雄

バスを降り月夜の道を五六分

加須市 萩原 康吉

曼珠沙華空き家となりしそのあとも

土浦市 今泉 準一

柿挽ぐや枝に眼鏡を弾かれし

青梅市 松野 英昌

△評▽引きちぎるように柿をいだとたん、跳ね返った枝に眼鏡をはじかれた。そんな苦勞もまた収穫の喜びに変わる。冬瓜や老いて我が面長くなり

東京 山口 照男

△評▽鏡に映る自分の顔をしげしげと見る。トウガンの形に重なって見えてくるのがおかし。外されぬままの半鐘鳥渡る

秦野市 林 ち島

父と子の間にバケツ黧日和

川崎市 久保田秀司

立冬やラッオに眠る古書店主

相模原市 はやし 央

退屈を弄ひある秋の昼

飯塚市 白木 小嶋

ふるさとに継ぎし和菓子屋雁渡る

鎌倉市 小川 求

秋風や路上ライブを遠巻きに

神戸市 田代 真一

村祭頭屋の務め終へにけり

龍ヶ崎市 本谷 英基

高原の雲の早さよ走り蕎麦

福岡市 松尾 ねこ

出会いの

季語

青木村を訪ねて

高田正子

10月初旬、俳句結社の仲間と長野県の青木村を訪れた。雨続きの寒い過ったが、当日は打って変わって秋晴れの見本のような青空に恵まれた。集ひあふ三十余名大高し

高田正子

青木村は長野県のほぼ中央にある自治体である。平成の大合併を拒否して村域も名前も変えず今に至る。かつて「夕立と騒動は青木から来る」といわれたそうだが、そうした「血」のなせるわざかもしれない。

・義民史を語りつぐ村蕎麦を刈る

権瓶玲子

この地の蕎麦はタチアカネといつて、平成生まれの新しい品種である。花は白いが実が赤く、花も実も見られるころには絶妙のコントラストだといふ。すでにその季節は過ぎ、だが新蕎麦には早過ぎた。今回の心残りはこれに尽きる。

・草紅葉よりくれなゐの蕎麦畑

高田正子

村は東急グループの創業者、五島慶太の出身地としても知られる。私は東京・世田谷の五島美術館へはよく行くのに、うかつにもこれまで気づかずだった。また明治生まれの自由律俳人、栗林一石路もこの出身であった。句会場をお借りした大法寺には国宝の三重塔があるが、塔へ登る道のかたわらにハシヤツ雑草にぶつかっておくくの句碑が、繚乱たる秋草に囲まれていた。

日本全国、どこも誰かのふるさとである。行けば懐かしい景に会える、と実感した旅であった。

(たかだ・まさこ＝俳人)